平成25年度

能楽協会大阪支部
朝日新聞厚生文化事業団

2013年 歳末助け合い 協賛能

ユネスコ第１回世界無形遺産［能楽］

●とき●

平成25年12月23日(月・祝)
《第１部》午前10時始
《第２部》午後２時半始

●ところ●

大阪市中央区上町Ａ番７号
大槻能楽堂
電話 (06) 6761－8055番

能楽協会大阪支部
朝日新聞厚生文化事業団

◇この催しの収益金は朝日新聞厚生文化事業団を通じて全額歳末助け合い運動へ寄付されます◇

当公演の記録は主催者が許可した専門家が行っております。一般のお客様による撮影・録音は鑑賞の妨げになるばかりでなく、肖像権や著作権等における権利侵害となりますので固くお断りいたします。

＝曲趣の解説＝

橋辨慶（はしべんけい）

比叡山の西塔に住む武　坊弁慶は、宿願の祈念のために北野へ七日間の丑の刻詣をしました。さらに今夜から十禅寺へ詣ろうと志します。これを知った家来は、辻斬りが出るからと云って、弁慶に思い止まるように勧めます。弁慶は一旦は思い止まろうとしますが、逆に辻斬りを懲らしめようと、夜更けて出かけます。

こちら牛若丸は、夜毎に鞍馬の寺を抜け出し、五条大橋の畔りで人に斬り掛かり、腕の立つ者を探していました。母親に諫められ、今夜限りと五条の橋に出て、通行人を待っていました。そこへ現れたのは弁慶です。お互い素性を知らずに、牛若丸は弁慶を挑発します。弁慶は得意の薙刀を振り回して切ってかかりますが、次第に牛若丸に切り立てられ、ついに薙刀を打ち落とされます。弁慶は降参し、互いに名乗り合って主従になり、牛若丸のお供をします。

「京の五条の橋の上…」の童謡などで知られる話とは、逆の発想になっています。

清　水（しみず）

太平の御代に茶の湯の会が盛んに行われました。太郎冠者の主人も流行に乗り遅れまいと茶会を開くことにしました。茶の湯には良質の水が必要です。太郎冠者に清水の水を汲んでくるように言いつけますが、太郎冠者は二度と水汲みに出掛けなくてよいように悪智恵を働かします。しかし、そうは旨く事が運ぶわけがありません。さて何事がおこるでしょうか。

杜　若（かきつばた）

京都から東国修行に出かけた旅僧(ワキ)が、三河の国八橋まで来て、今を盛りと咲き誇る杜若の美しさに、眺め入って休んでいますと、一人の女性(シテ)が声をかけてきました。この八橋の杜若は、在原の業平が東下りの時に、この八橋の杜若を見て詠んだ「からころも、きつゝなれにし、つましあれば、はるばるきぬる、たびをしぞおもふ」の和歌を引用し、この句の上の五文字が「かきつはた」となっていることなど、伊勢物語に書かれていることを話して聞かせたのち、一夜の宿をと誘い、旅僧を庵へ案内します。

庵に着くとその女は、業平の形見の冠と衣を着して、旅僧に見せます。僧は不思議に思い、問い尋ねますと、この冠と衣は伊勢物語に詠まれた唐衣と、業平の五節舞の冠であって、業平の形見として持っていると云います。僧が不審に思うと、自分はこの杜若の精であると名乗ります。また、業平は歌舞の菩薩の化現であるから、その詠まれた和歌は説法の妙文となって、草木も仏果を得ることが出来ると語り、伊勢物語の東下りを曲舞にして語り舞い、五節舞も舞いますが、夜明けと共に、草木国土悉皆成仏の御法を得た喜びを述べて、消え失せました。

雷　電（らいでん）

菅丞相こと菅原道真は、内裏から筑紫太宰府へ左遷され、その任地にて不遇を嘆きつつ、亡くなりました。死後丞相は、梵天の憐れみをうけ、生前の恨みを晴らすことにしました。比叡山の師匠法性坊の庵室を訪れ、師弟の睦まじさを懐古します。両親の居なかった菅丞相は、法性坊に育てられ教育を受けました。その師匠の恩に感謝をしましたが、恨みを晴らすため、雷となって内裏に乱れ入るから、邪魔をしないように頼ます。師匠は王土に住む者は、天皇の命令は背けないと断ります。丞相は、形相を変えて消え失せます。

京都では、丞相の祟りと騒がれるほど、雷が激しく騒然となっていました。天皇は法性坊を招き祈祷をさせます。雷神と化した丞相が現れますが、法力に屈します。天皇は丞相に天満大自在天と諡名を贈り、その霊を弔いました。以後菅丞相は天神さんと親しく崇められ、学問と雷除けの守り神とされています。

後場の舞台に一畳台が二台置かれ、宮中の御殿の建物を象徴します。その二つをシテとワキが追い掛け合いをして、雷の凄まじさを表現します。

（屑人　記）

■会場略図■

入場料金（各一部）

- 一般券　¥3,000（前売券）・¥3,500（当日券）
- 学生券　¥1,500（前売・当日共通）

入場券発売所

- チケットぴあ　Pコード：432-772
- 吉田書店　●各能楽堂　●出演楽師宅

二〇一三年　歳末助け合い協賛能

平成二十五年十二月二十三日(月・祝)午前十時始

第一部

能（観世流）

牛若丸　梅若利成
弁慶ノ従者　井戸良祐
武蔵坊弁慶　梅若猶義

橋辨慶

都ノ者　泉　慎也
大鼓　山本哲也
小鼓　清水晧祐
笛　左鴻雅義
後見　立花香寿子　梅若基徳
地謡　上野雄介　小松勝憲　金子昭　山中雅志　長山耕三　池内光之助　井戸和男　梅若善久

狂言（和泉流）

清水

太郎冠者　小笠原匡
主　山本豪一
後見　泉　慎也

能（観世流）

杜若ノ精　松浦信一郎

杜若

恋之舞
旅僧　森本幸治
大鼓　辻芳昭
小鼓　荒木建作
太鼓　中田弘美
笛　赤井啓三
後見　前田和子　山本博通
地謡　上野朝彦　阪本昭三　川中治作　水田雄晧　寺澤幸祐　河村栄重　波多野晋　梅若基徳

仕舞（観世流）

高砂　尾崎早苗
地謡　山下麻乃　前田飛南子　植田叔子　赤井きよ子

経正　池内光之助
地謡　長山耕三　小林喜久　寺澤忠芳　梅若善久

野宮　大槻文藏

仕舞（宝生流）

邯鄲
楽アト　石黒実都
地謡　渡辺珪助　徳永力雄　澤田宏司　植田竜二　畑宏隆

仕舞（金剛流）

小鍛冶
キリ　中嶋謙昌
地謡　都丸植田恭三勇　北川米喜　藤田章三

能（観世流）

管丞相雷神　生一知哉
従僧　喜多雅人
大鼓　辻雅之
小鼓　上田慎也
笛　上田貞光義明

雷電

法性坊律師僧正　広谷和夫
従僧　中村宜成
能力　善竹隆司
後見　山中雅志　上野雄三
地謡　伊原昇　越知芳彦　佐野和之　井戸良祐　河村栄重　久保田稔　上野朝義　山本博通

附祝言

終了予定　午後一時半過

二〇一三年　歳末助け合い協賛能

平成二十五年十二月二十三日(月・祝)午後二時半始

第二部

能（観世流）

牛若丸　梅若秀成
弁慶ノ従者　今村哲朗
武蔵坊弁慶　大西礼久

橋辨慶

都ノ者　善竹忠一郎
都ノ者　善竹隆司
大鼓　上野義雄
小鼓　久田陽春子
笛　森田啓子
後見　寺澤幸祐　山本章弘
地謡　上野朝彦　山田薫　永田克壬　林本大　山本正人　小西弘通　大西智久　勝部延和

狂言（大蔵流）

清水

太郎冠者　善竹隆平
主　上西良介
後見　上吉川徹

能（観世流）

杜若ノ精　赤松禎英

杜若

恋之舞
旅僧　福王茂十郎
大鼓　守家由訓
小鼓　久田舜一郎
太鼓　上田悟
笛　野口亮
後見　武富康之　大槻文藏
地謡　上野雄介　山田薫　鶴克彦　今村哲朗　齊藤信輔　山本正人　齊藤信隆　生一知哉

仕舞（観世流）

高砂　塩谷恵
地謡　小川晴子　立花香寿子　前田和子

経正　勝部延和

野宮　大西智久
地謡　林本大　上野雄三　小寺一郎　齊藤信輔

邯鄲
楽アト　山本章弘

仕舞（金春流）

小鍛冶　佐藤俊之
地謡　田中直樹　金春穂高　酒井賢一　湯本哲明

能（喜多流）

管丞相雷神　高林呻二
従僧　喜多雅人
大鼓　森山泰幸
太鼓　中田弘美
笛　斉藤敦

雷電

法性坊律師僧正　福王知登
従僧　中村宜成
能力　善竹隆平
後見　高林白牛口二　大島輝久
地謡　高林昌司　長島茂　長田鄉　長田驍　松井俊介　松井彬

附祝言

終了予定　午後六時過